

日の当たる門

小川未明

青空文庫

きかん坊主ぼうずの三ちゃんさんちゃんが、良ちゃんりょうちゃんや、達ちゃんたつちゃんや、あや子さんあやこさんや、とめ子さんとめこさんや、そのほかのものを引きつれて、日の当たっている門もんのところへやってきました。

「学校がっこうごっこをしようや、さあ、ここへならんで。」と、三ちゃんは命令めいれいをしました。けれど、みんなは、まだ学校がっこうへ上がっていないので、よく字じを知しっておりません。

「気きをつけ、番号ばんごう！」

「一、二、三、四つ、五、六、七つ。」

「さあ、まる書かけ。」

三ちゃんさんちゃんは、ポケットから、白墨はくぼくを出だして、堀へいに大きなまるを書かきました。白墨はくぼくを持つもている子供こどもたちは、めいめい門もんの上うえへ、またあちらの堀へいの上うえへ、まるを書かきました。白墨はくぼくを持つもていない子供こどもたちは、ぬかるみのどろんこの中なかへ棒ぼうを入れて、きれいに洗あらつてある門もんの前まえの石いし置いたみの上うえへ、土つちでまるを書かきました。三ちゃんさんちゃんは、みんなの書かいたまるをひととおりながめて、さも満足まんぞくしたように、

「うん。」と、うなずきました。

「ごんどは、なんにしよう？」

「唱歌だ。あいこく行進曲をうたおう。」

みんなは、声をあわせてうたいました。

「見よ、東海の空あけて、きよく日高くかがやけば、天地の正気はつらつと、希望はおどる大八島……。」

「もういい。あや子さんが、いちばんうまい。達ちゃんはだめ。」と、三ちゃんが、点をつけました。

「僕、もつとうまく歌えるやい。」と、達ちゃんは、不平をいいました。

「こんなこと、もうよしたーと。」と、一人が、叫びました。

「だめ、こんどあつちへいくんだ。原っぱへいって、戦争ごっこをするんだ。気をつけ、前へ！」

三ちゃんは、号令をかけました。そして、自分が、いちばん先頭に立って、テンテ、テンテ、トテトテト——と、口でらっぱのまねをして、威張っていきました。その後から、みんながついて、あちらの横町の方へまがって見えなくなってしまうした。

ちやうど、そのじぶん、門のある家のお勝手もとのガラス戸が、ガラ、ガラとあく音が

したのです。ほおと両手りょうてを赤あかくした女じょちゆう中ちゆうが、お使いつかにいこうとして、門もんのところまでくるとびつくりしました。

「まあ、どこのわるい子供こどもだろう、こんないたずらをして。」と、しばらく立たつて、あつけにとられながら、門もんの上うえや、石いし畳たたみの面おもてや、塀へいに書かかれた白しろい丸まるや、どろんこの丸まるを見つめていました。

この家いえのおじいさんが口くちやかましいので、毎朝まいあさ、女じょちゆう中ちゆうさんは、つめたいのをがまんして、門もんをふいたり、石いし畳たたみをゴシゴシとたわしで、みがくのでありました。女じょちゆう中ちゆうさんは、お使いつかから帰かえったら、またおそうじをやりなおすうえに、塀へいまでふかなければならぬかと思おもうと、がっかりしてしまったのです。

「このへんには、ほんとうに、わるい子こがたくさんいるとみえて、いやになってしまふ。」と、ひとり、口くちの中なかで、ぶつぶついいながら、出でかけていきました。

この通りは、先さきが止とまっているので、あまり人が歩ひきませんでした。それを幸さいわいにして、また天てん氣きのいい日ひは、朝あさから、昼ひるすぎまで、日ひがよく当あたるので、子こ供どもたちの遊あそび場ばとなつていました。

「勇ゆうちゃん、しつかりお投なげよ。」と、敏としちゃんは、ポン、ポンとグラブをたたいていま

した。

「よし、いい球を出すよ。」と、こんどは、勇ちゃんの強く投げ出したボールは、敏ちゃんの中の、ボールといつて、うまくおさまりました。

そのうちに、あつ、という勇ちゃんの声が出たかと思うと、球はねらいをはずれて、ドシンと大きな音をして、板塀にうちあたったのです。二人は、いっしょにくびをすくめました。そして、顔を見あつて笑いました。

「おじいさんがしかるよ。」と、そばで見えていたよし子さんが、いいました。

「しかつたら、よすよ。」と、勇ちゃんが、いいました。

「勇ちゃん、いまのはすべったんだ。もつと強くなつていいよ。」と、敏夫は、元気でありました。

「このボールがいけないんだね。」

二度めに塀へ球があたつたときは、板を破りそうな音をたてました。すると、門のところへおじいさんが出てきました。

「おい、子供、あつちへいつてやれ、門燈をこわすと大事だ。ここは人のとおる道で、ボールを投げて遊ぶ場所でない。こんど、塀にあたるとゆるさないぞ。」と、おじいさん

は、いいました。おじいさんのひっこむのを見ると、敏ちやんが、

「塀へいにあたるとゆるさないって、どうするんだらうね。こんなくさった塀へいがなんだい。」
と、いつて、ボールを投げなつけるまねをしました。

「原はらつばへいこうか？」

「ああ、いこう。」

敏ちやんは、手に持もっているボールを高たかく空そらへ上げて、自分じぶんでうけとつていましたが、
どうしたはずみにか、ボールは門もんの内うちへ落おちて、あちらへころころと、ころがつていきま
した。

「エヘン。」と、おじいさんの咳せきばらいがしました。女じょちゆう中ちゆうが、なにかおじいさんに話はな
している声こえがきこえます。

「いうことをきかなかつたら、とりあげてしまえばいいのだ。」

「ほんとうに、この近きん所じよには、いたずら子こが多おほうございます。」

勇ゆうちやんと、敏としちやんとは、舌したを出だしていました。よし子こさんは、笑わらっていました。

「ボールが入はいったから、こちらへ投なげておくれ。」と、敏としちやんが、いいました。門もんの内うち
から、なんの返へん答とうもありません。勇ゆうちやんは、しゃがんで、門もんの下したのすきまからのぞく

と、ボールは山茶花の木の根もとのあたりにころがっていました。

「さおを持つてこようか。」と、敏ちやんがいました。

「あちらへ、ころがってしまわないかな。」

「よし子さん、取つてきてくれない。」と、勇ちやんがたのみました。

「いやよ。」と、よしさんは目を大きくみはりました。

「困つたなあ。」

「みんな内へ入つたら、僕とつてくるから。」

そのうちに、女中もいなくなるし、おじいさんも、庭の方へいったようです。勇ち

やんは、門のわきについている扉をおすと、チリン、チリンとけたたましく鈴がなりまし

たが、彼はすばやく内へかけ込んで、ボールを拾うと、また走つて門の外へ出ました。扉

をしめるときに、力をいれて引いたので、チリ、チリ、チリンという音が、けたたましく

しました。

「さあ、原っぱへいこう。」

たちまち、子供らの姿は、ここから見えなくなっていました。

* * * * *

その翌日あくるひもいい天気てんきでした。この門もんのところには、朝あさ早くから日ひが当たあっていたの
です。

炭屋すみやの小僧こぞうさんが、塀へいによりかかって、ぼんやりとひなたぼっこをしていました。夜の
あいだお霜しも柱はしらが、日ひの光ひかりをうけて、しだいにとけています。敷石しきいしの上うえは乾かわいてい
るが、土つちの上うえをふむと足あしの跡あとがつかまりました。

「もう、得意とくいをまわったのか、早いはやなあ。」と、そこへやってきたのは、同じ年おなとしごろの酒
屋かやの小僧こぞうさんでありました。

「寒さむくてしようがないや。」

「そんなに肥ふとつていても寒さむいかなあ。」

「ばかいつていらあ、おまえは寒さむくないか。」と、炭屋すみやの小僧こぞうさんが、いいました。

「相撲すもうとろうか、おまえは強つよそうだな。」と、酒屋さかやの小僧こぞうさんが、いいました。

「おまえとなら、負まけやしない。」

「じゃ、こい！」

「よしてきた。」

ふたりふたりの小僧こぞうさんは、日ひの当あたる前まえの石いし畳たたみの上うえで、たがいに押おしあい、もみ合あいして

いました。うん、うん、といううなり声こゑがきこえたのです。梅うめの盆栽ぼんさいを縁側えんがわにおいて、ながめていたおじいさんは、小僧こぞうさんたちのうなり声をきいて、なんだろうと思おもいました。「また、うちの門もんのところで騒さわいでいる。あすこは、よく日ひが当あたるものだから、いいことにして、みんなあすこへきて、塀へいによりかかつて、きれいにしておく石いしの上うへをよごしてしまう。どれ、ひとつどなってやろうか。」

おじいさんは、わざと勝手かってもことから、門もんの方ほうへまわりました。そして、塀へいについている節ふし穴あなから、外そとのようすをのぞいて見みました。すると、いま二人ふたりの小僧こぞうさんが顔かおを真まっ赤かにして、たがいに負まけまいとして取とり組くんでいる最さい中ちゆうでした。

「ははあ、やっているぞ。」と、おじいさんは、しかることを忘わすれてしまつて、じつと、どちらが勝かつか、負まけるか、見みとれていました。

「そうだ、そうだ、もうひと押おしだ。」と、おじいさんは、自分じぶんでも力りきんでいました。そして、心こころに、五十年ねんむかしも昔ともに友ともだちと相撲すもうをとつたことを思おもい起おこしたのです。

「そうだ、そうだ、うん、どちらもなかなか強つよいぞ。」と、口くちの中なかで、おじいさんは、いつていました。

二人ふたりの小僧こぞうさんは、どちらも力ちからがあつて、いい勝しょうぶ負ぶだったが、炭屋すみやの小僧こぞうさんのほう

が肥ふとっているだけに体たい力がつづくともえて、酒屋さかやの小僧こぞうさんはへとへとになって、石い畳じだたみの上うえへ倒たおれてしまいました。

「やつぱり、おれは弱よわいなあ。」と、酒屋さかやの小僧こぞうさんはため息いきをつきながら、悲観ひかんしました。おじいさんは、

「なんだ、そんなにくじがないことかどうか。もう一番ばんやってみろ。」と、心こころの中で、叫さけびました。

「どれ、もう一度どやろうか。」と、酒屋さかやの小僧こぞうさんは、立ち上たがりました。けれど、こんどは、なんの苦くもなく、炭屋すみやの小僧こぞうさんに、たたきつけられてしまいました。

「おまえなんか、いくらかかってもだめさ。」と、炭屋すみやの小僧こぞうさんは、威張いばりました。酒屋さ屋やの小僧こぞうさんは、いかにまくやしそうです。これから、毎まい朝道あさみちであっても、炭屋すみやの小僧こぞうさんに頭あたまが上あがらないと思おもうと、残念ざんねんでたまりません。

「おい、もう一度どやろう、今度こんど負けたら、降参こうさんするよ。」と、酒屋さかやの小僧こぞうさんは、いいました。おじいさんは、

「そうだ、その意気いきだ、しっかりやれ。」と、心こころの中で、酒屋さかやの小僧こぞうさんに応援おうえんしながら、堀へいの節穴ふしあなから目めをはなしませんでした。

「いいか、今度負けたら降参するんだぜ。」

「いいとも。」

二人は、たがいににらみあつて、白い息をはあはあやっていましたが、酒屋の小僧さんは、弾丸のように、相手の胸へ飛び込んでいきましました。二人の顔が、たちまち真っ赤になりました。さあ、今度こそ大相撲です。一人は肥つて力は余っているし、一人は、負ければ恥になるだけでなく、いよいよ降参しなければなりません。どうしても負けられない一番です。見ているおじいさんまでが、苦しくなってきました。

「うん。」

「うーん。」

二人は、うなりつづけて、組み合つたまま押ししたり、押し返したりして、相手のすきをねらつていました。

「うーん。」と、おじいさんもうなつて、自分までが相撲をとるような気持ちでいました。ちようど、そこへ女中が、

「また、あすこへきて、石畳の上をよごしている。」と、口ごごをいいながら、お勝手もとから出てくると、おじいさんは、手でこちらへきてはならぬと追い返しました。

なんといつても、酒屋さかやの小僧こぞうさんは、いっしょうけんめいです。うん、うん、炭屋すみやの小僧こぞうさんを押しおしていましたが、炭屋すみやの小僧こぞうさんは、よくこらえていました。

「もうひと息いき。」と、おじいさんが、いったと同時にどうじ、酒屋さかやの小僧こぞうさんがこぞと押しおした力ちからに、炭屋すみやの小僧こぞうさんはどつと仰向きあむむに倒たおされて、ミシ、ミシと行って、塀へいの板いたはこわれしました。酒屋さかやの小僧こぞうさんは、勝かつた喜びよろこもどこへやら、急に顔かおの色いろを変かえて、倒たおれた炭屋すみやの小僧こぞうさんと、こわれた塀へいとを見みくらべましたが、

「よし、よし、塀へいなんか、かまわない。おもしろかったよ。」と、おじいさんが、ふいに門もんの外そとへ出でましたので、二人ふたりの小僧こぞうさんは、二度どびつくりして、おじいさんに、いくたびも頭あたまをペコペコ下さげて、いってしまいました。

「ああ、子供こどもは元氣げんきでいいなあ。」と、おじいさんは、空そらを見み上げました。そのおじいさんの顔かおを見て、太陽たいようは、にっこりと笑わらいました。それからおじいさんは、子供こどもが家いえの前まえへきて遊あそんでも、しからなくなつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

※表題は底本では、「日《ひ》の当《あ》たる門《もん》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日の当たる門

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>